

目次

A. 調査に協力してくれた人たち	1
B. 家庭状況	1
C. 住居と通学	3
D. 生活費の状況	4
E. アルバイト	5
F. 食事	6
G. 耐久消費財	6
H. 学内施設の利用	7
I. 入学と学業	8
J. 課外活動	10
K. 旅行	11
L. 健康・悩み	12
M. 進路（進学・就職）	13

A. 調査に協力してくれた人たち

京都大学の学部と大学院に在籍する学生を対象に学生生活の実態を把握し、キャンパス全般の環境整備に役立てるため、昭和28年以降『学生生活実態調査』を実施しています。

すべての京大生のうち学部生・大学院生からそれぞれ7人に1人の割合で、2,924人を無作為に抽出し、平成17年11月にアンケート調査を実施したところ、前回は11ポイント上回る約55%に当たる1,622人から回答が寄せられました。調査に協力してくれた学生諸君に感謝いたします。

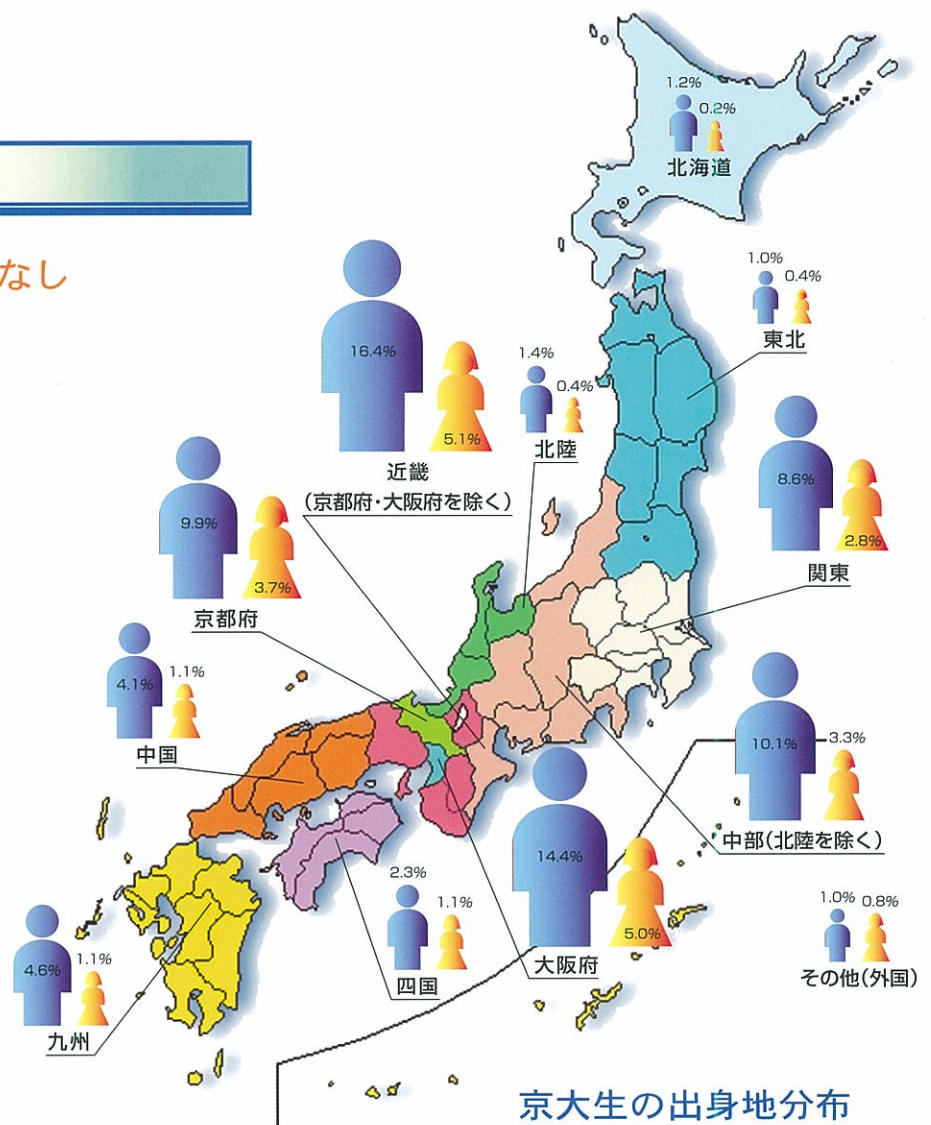
学部・大学院	学部	修士課程	博士課程	合計
総合人間学部	70	—	—	70
文学部・文学研究科	52	21	12	85
教育学部・教育学研究科	33	12	3	48
法学部・法学研究科	42	11	9	62
経済学部・経済学研究科	19	8	4	31
理学部・理学研究科	92	81	65	238
医学部・医学研究科	62	1	40	103
薬学部・薬学研究科	35	15	4	54
工学部・工学研究科	328	149	43	520
農学部・農学研究科	55	80	38	173
人間・環境学研究科	—	36	3	39
エネルギー科学研究科	—	31	7	38
情報学研究科	—	34	12	46
アジア・アフリカ地域研究研究科	—	—	9	9
生命科学研究科	—	17	17	34
地球環境学堂・学舎	—	10	7	17
法科大学院	—	39	—	39
合計	788(44%)	545(90%)	273(54%)	1606(55%)

()内の数字は回収率を表す。
上記表には、所属不明な16名は含まれない。

B. 家庭状況

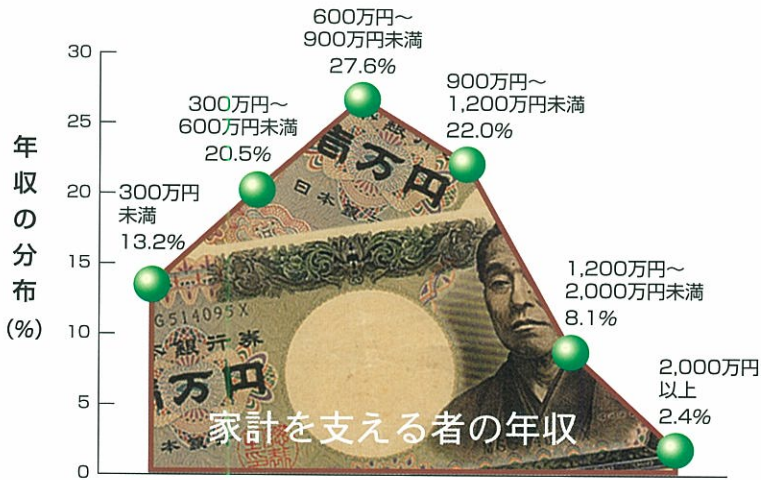
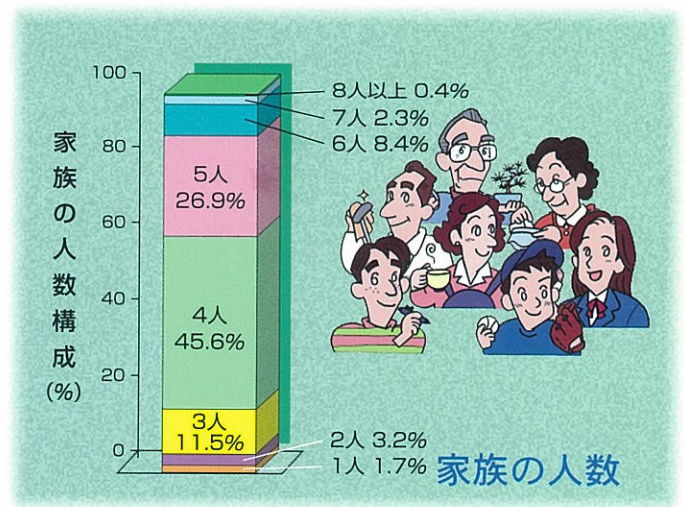
出身地・家族構成に変化なし

京大生の家庭所在地は、全体の54.5%が近畿圏で、京都・大阪府が33%を占めている。このうち大阪府が19.4%を占めてトップ、ついで京都府が13.6%となっている。大きな変化はないが、いずれも前回は若干上回る数字となった。この傾向は学部・修士課程学生では共通しているが、博士課程学生では京都府に家庭があるとする回答が22.7%で最も多く、大阪の16.5%を凌いでいる。結婚などの事情で、親元から独立して京大近辺に家庭を構えたことと関係するものと考えられる。



京大生の出身地分布

家族の人数は、《4人》が最多の45.6%、ついで《5人》の26.9%、《3人》の11.5%となる。この順位は学部・大学院学生で共通する。前回に比して《4人》とする回答が3%ほど増えたのに対し、《5人》とする回答がやや減少している。両親については、95%が両親は健在とするが、博士課程学生では3.3%が母のみ、1.1%が父のみ、それぞれ健在とする回答があった。

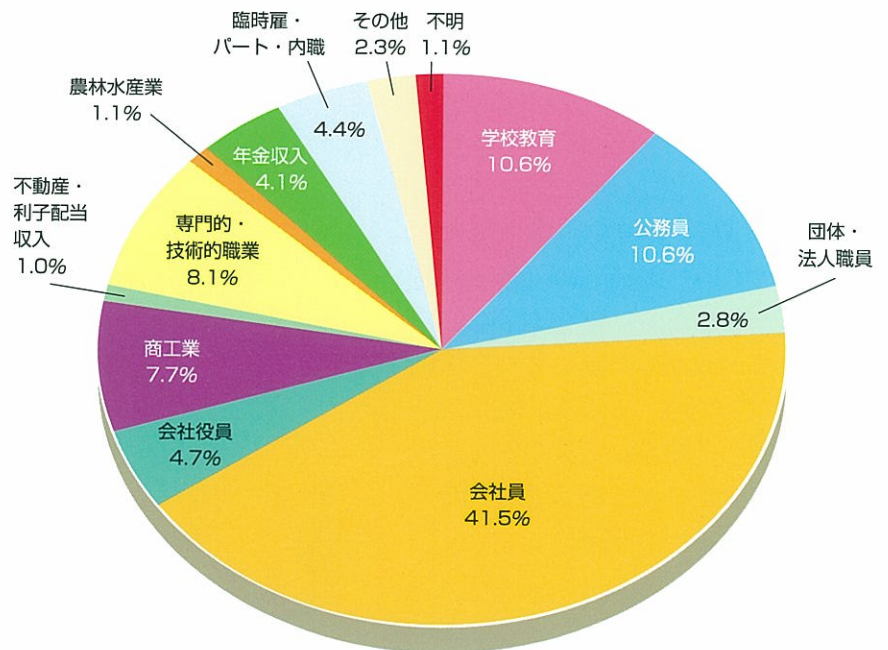


既婚者は、学部学生では0.4% (実数3名)、修士課程学生で1.6%だったのに対し、博士課程学生では15.4%に及んでいる。ただ、この数値は20%を越えていた前回は下回った。既婚者のほぼ半数に子供があり、そのほぼ半数が《1名》としている。こうした数値は、ほぼ前回と同様であった。

年収も前回とほぼ同様

《家計支持者》は、全体の84.1%以上が《父》、7.7%が《母》であった。学部・修士課程学生ではこの両者が一・二位を占めるが、博士課程学生では《本人》とする者が20.9%、《配偶者》をあわせると26%に達している。こうした点はほぼ前回同様である。

《主な家計支持者》の年収では、《600万円以上900万円未満》が27.6%で最多、ついで《900万円以上1200万円未満》が22.0%、《300万円以上600万円未満》が20.5%で続く。ただし博士課程学生では、前回の37%から大きく減少しているものの《300万円未満》が22.7%を占め、《300万円以上600万円未満》の24.5%に続いている。これは自身を主たる家計支持者とする者が多いためであろう。家計支持者の職業は、全体では《会社員》が41.5%で最多、ついで《公務員》、《学校教員》、《専門的・技術的職業》が10%前後で続いており、ほぼ前回同様の分布を示している。

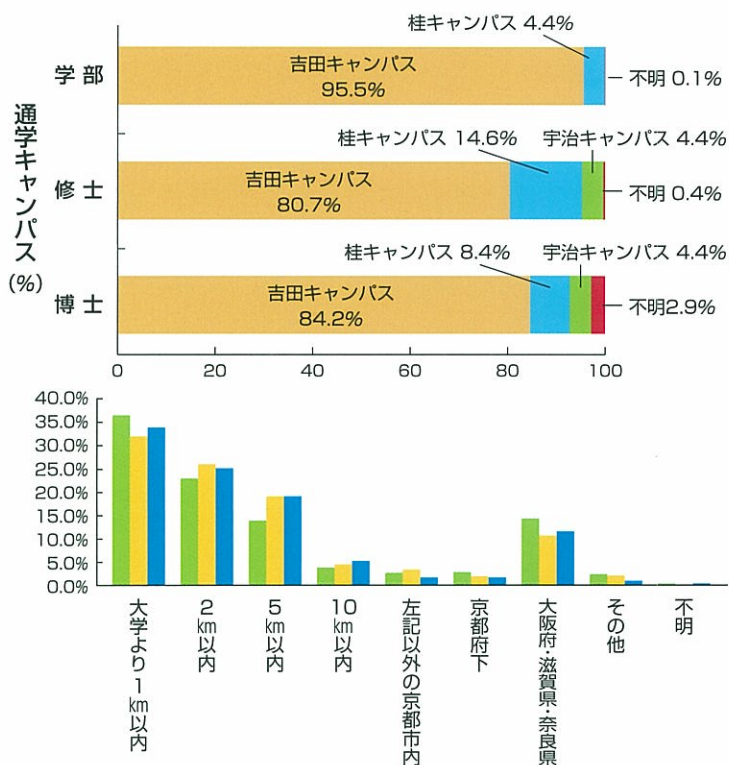


家計を支える者の職業

C. 住居と通学



自宅外生が圧倒的、大半はアパート・マンションに居住



工学研究科が本格的に桂キャンパスに移転して最初のアンケートとなったが、桂キャンパス通学者は全体の8.5%、修士課程学生では14.6%、博士課程学生では8.4%であった。《自宅生》の割合は、全体で27.4%と前回よりやや増加しており、自身の家庭をもつ割合が高い博士課程学生では37%に達している。また、通学しているキャンパスから《2km以内》に居住する学生は58.7%で、前回よりやや減少し、《大阪・滋賀・奈良県》の居住者が12.8%に増加している。これらの変化と、桂キャンパス移転の関係は不明確だが、今後の動向が注目される。

また、自宅外通学者の住居の種別では《アパート》・《マンション》が合計88.3%、《一人部屋》が91.9%で圧倒的多数ではあるが、いずれも前回、前々回よりわずかながら減少している。部屋の広さは《10㎡（6畳）以上15㎡（9畳）未満》が、全体の約50%を占め最多数であるが、この割合は学部生から博士課程学生に至るまで同様となっている。

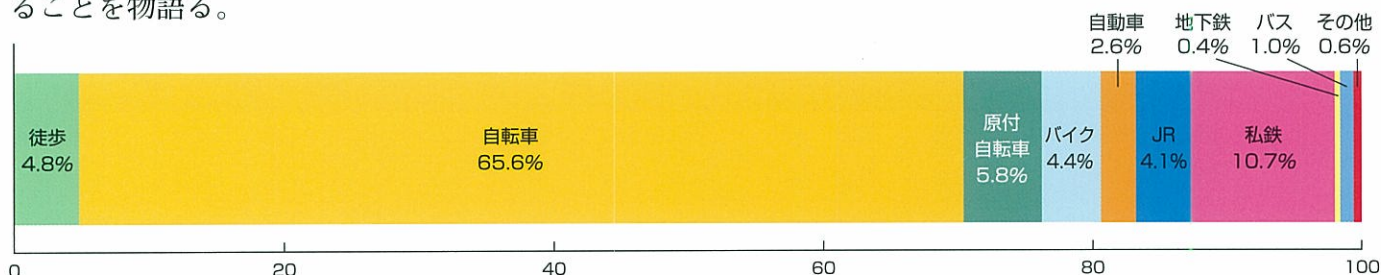
各キャンパス(吉田・桂・宇治)を中心とする通学圏



京大生の主な通学手段は自転車が主流

住居から大学までの主な交通手段としては、《自転車》が65.6%で、圧倒的多数を占めている。前々回の59.4%、前回の62.8%を上回り、依然として増加傾向にあることがわかる。逆に《JR以外の私鉄》が前回の13.1%から10.7%に減少しているが、私鉄は複数の交通手段を用いる場合の一位(27.7%)となっており、ターミナルからの自転車利用が増加した可能性も高い。

一方、通学の片道所要時間では、《15分未満》が62.7%、《15分以上30分未満》を加えると77%に達する。この数値は前回・前々回と同様で、桂キャンパスも含めて、京大生の多くがキャンパス近辺に居住し、学生街を形成していることを物語る。



D. 生活費の状況



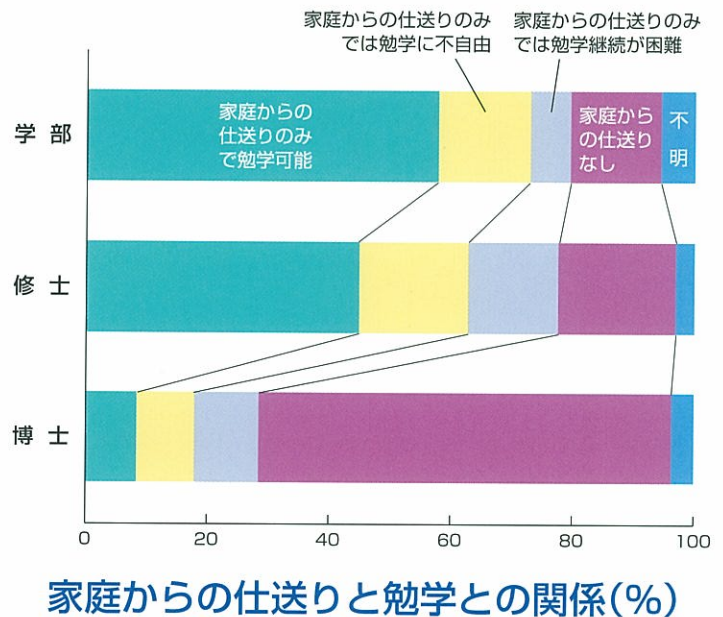
収入の部

今回は自宅通学者と自宅外通学者に分類せずに、ひとまとめにして平均化している点にご留意いただきたい。まず、学部生の平均月収に《家庭から》(61%)と《アルバイト》(24%)が占める割合は合わせて75%、修士課程では《家庭から》(48%)と《奨学金・研究奨励金》(34%)が合わせて82%と、家庭にたいする依存度が高い。一方、博士課程では《奨学金・研究奨励金》(49%)と《アルバイト》(37%)が合わせて86%と、自立性が強くなっている。これは、博士課程の68%が《家庭からの仕送りなし》(学部生では15%、修士課程では19%)であることと一致する。学部生と修士課程では《アルバイトを増やしたい》(それぞれ37%と21%)と考える学生が多いのに対して、博士課程では時間的な余裕がないため、《奨学金・研究奨励金を増やしたい》(21%)と考える学生が多くなっている。



支出の部

生活基礎支出費(食費・部屋代・水道光熱費)は、学部生・修士課程・博士課程の間に大きな差は見られない。したがって、学部生ではそれが総支出額の57%にも昇っている。博士課程では収入が増えているせいか、《剰余金・預貯金》が多くなっている。三者とも、支出のうちでも増やしたい項目として、《勉学費》(16%)を挙げ、一方、最も減らしたい項目として《食費》(17%)を挙げている。今回の調査では明らかにされていないが、昨今の携帯電話やパソコンの普及による通信費の増加も生活費圧迫の一因になっているものと思われる。



平均収支金額

1ヶ月の収入額(平均) (単位:千円)

区分	家庭から	奨学金・研究奨励金	アルバイト	借入金	その他	収入合計
学部	70.9	15.9	27.6	0.1	1.1	115.6
修士	68.9	48.7	21.6	0.2	3.0	142.4
博士	17.1	84.0	63.3	0.1	8.8	173.3

1ヶ月の支出額(平均) (単位:千円)

区分	食費	部屋代	水道光熱費	衣服費	勉学費	課外活動費	交通費	医療費	教養・娯楽費	嗜好品費	借入金返済	その他	剰余金・預貯金	支出合計
学部	25.2	35.9	4.4	6.5	5.2	6.1	7.0	0.7	5.6	2.9	0.1	1.4	14.3	115.3
修士	32.5	44.2	5.9	6.2	7.8	4.2	9.4	1.4	7.1	4.4	1.1	1.3	16.3	141.8
博士	33.8	38.3	6.4	6.3	11.0	4.1	10.0	5.2	7.5	5.0	0.7	4.7	30.8	163.6

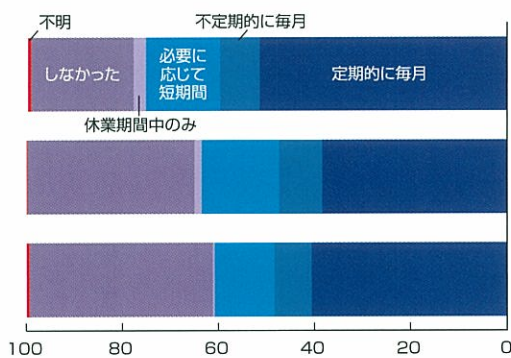
E. アルバイト



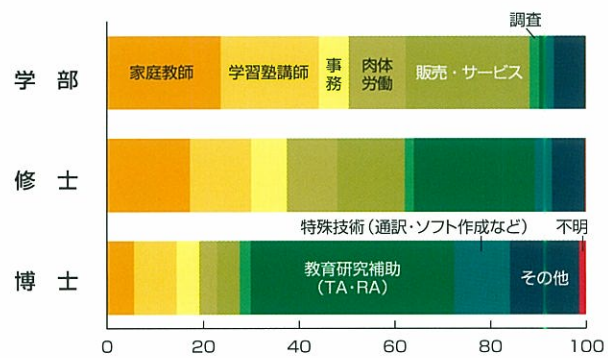
定期的なアルバイトは減少傾向に

アルバイトを《定期的に毎月した》者の割合は、学部生では52%、大学院生では40%前後となっている。職種については、学部生では《販売・サービス》(26%)、《家庭教師》(24%)、《学習塾講師》(21%)の主に3つに分散し、修士課程では《教育研究補助》(25%)、《家庭教師》(17%)、《学習塾講師》(13%)の順となり、博士課程では《教育研究補助》(43%)と《特殊技術》(12%)が主となっている。月平均就労時間は、全体の過半数の者が、学業に大きな支障のない30時間未満であった。アルバイトの紹介先は、学部生では《友人・知人・先輩》(35%)と《紹介誌・新聞広告・チラシ》(29%)が主となり、修士課程では《友人・知人・先輩》(41%)、《教員》(16%)、《紹介誌・新聞広告・チラシ》(13%)の順となった。一方、博士課程では《教員》(49%)と《友人・知人・先輩》(26%)が主となり、教員が紹介する《教育研究補助》の割合の増加に対応していると考えられる。アルバイト収入の使途については、学部生・修士課程では《衣食住費》と《教養・娯楽費》が合わせて63%であったのに対して、博士課程では《衣食住費》と《勉学費》が合わせて84%と、両者の関心事の違いを反映している。アルバイト経験に関しては、全体の78%が《人生(社会)経験が得られて有意義であった》(66%)または《自分の勉強に役立った》(12%)と回答している。

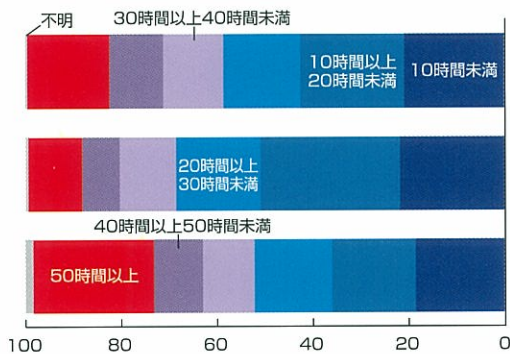
アルバイト状況 (%)



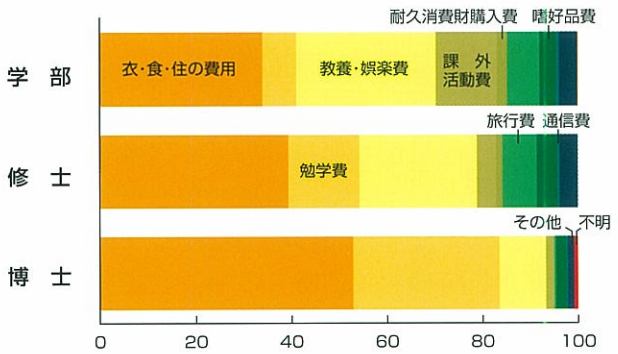
アルバイトの種類 (%)



アルバイト月平均就労時間 (%)



アルバイト収入の使途・使途予定 (%)

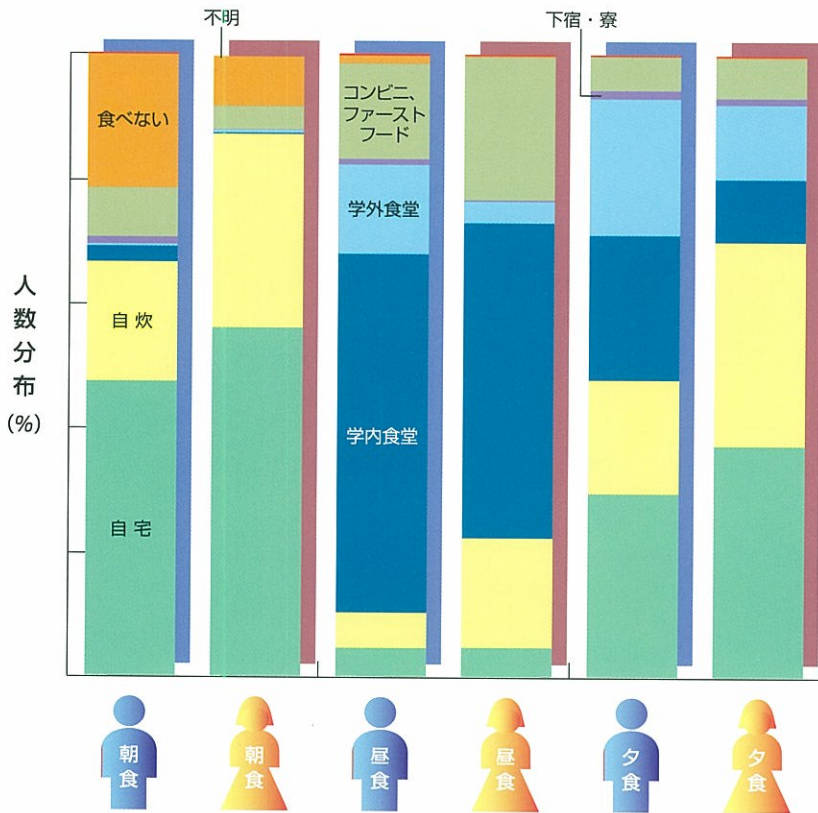


F. 食事



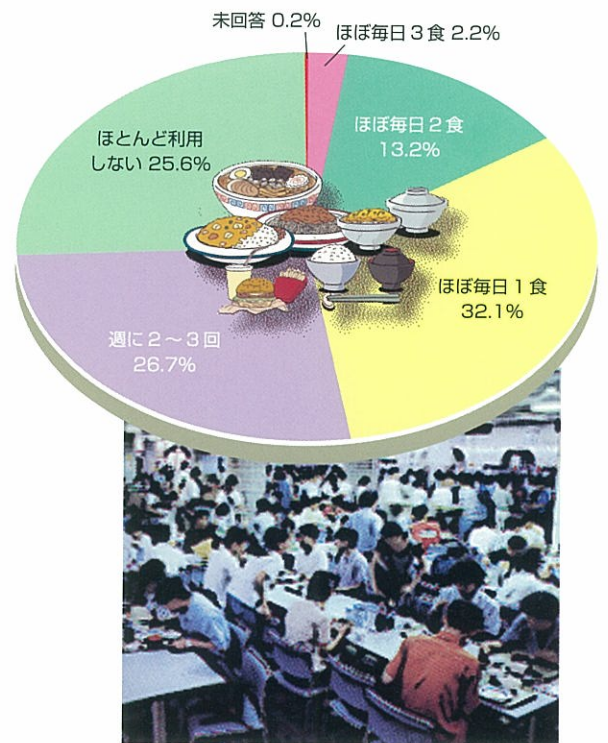
5人に1人は朝食抜き、昼食は学内食堂利用者が56%

朝食をとらない学生は全体で18%と前回調査より減少している。学部生16%、修士21%、博士18%と、学部生の健康志向がうかがえる。夕食を、自宅・自炊で摂取する割合は、修士が前回調査の34%から49%と上昇し、博士とほぼ並んだ。学内食堂を利用しない学生の割合は不変で、その理由としての第一位が《利用したい昼食時は何時も混んでいる》という回答で、次点で、売店のおにぎりなどで済ませているという回答であった。



京大生の三食

学内食堂の利用状況

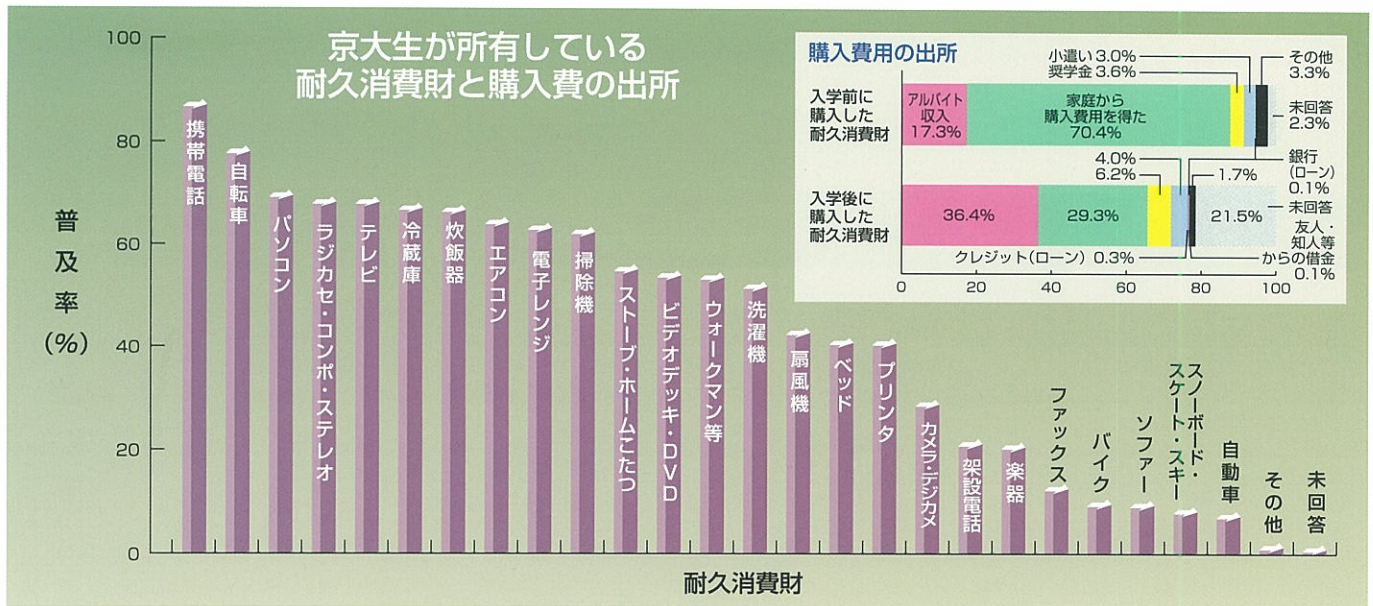


G. 耐久消費財



携帯電話の所持者が全体で87.5%。ネット接続は67%

携帯電話は学生生活に完全に定着したといってよい。昨年より微減したとはいえ、10人中9人近くが保有している。それに対して、従来の架設電話は、ほぼ2割の普及率まで低下している。ただし、博士課程の院生のあいだでは、携帯保有率が6割近くに落ち込み、学部生や修士院生との違いが際立っている。携帯に次いで保有率のたかいモノは、8割の自転車だ。次いで、テレビ、冷蔵庫、炊飯器、ラジカセなどの下宿生活の定番財がならび、新たな必需品としてのパソコンがそれにつづく。また、学部、院生を問わず楽器の保有者の多さも特徴的である。こうした耐久消費財を購入するために、全体の7割の学生が親元からの援助に依存している。ただし院生のあいだでは、アルバイトと奨学金などの資金に頼るものが増え、博士課程の院生では、4割が自分で資金を捻出している。また入学後の耐久消費財購入については、学部生、院生ともに、アルバイトで稼いだ資金をあてる傾向(36.4%)を示している。



H. 学内施設の利用



利用頻度が高い生協と図書施設

京大生がもっとも頻繁に活用する学内施設は、生協食堂と購買部である。《ほとんど毎日利用する》と《週に2~3回程度利用する》をあわせた高頻度利用率は、食堂、購買ともに約7割を占める。これには、学部、院生の違いはほとんどあられない。ただ吉田のコンビニ利用についてみると、学部生のあいだの高頻度利用者は、15%を超えるのにたいして、院生のあいだでは5%以下となっており、まったく利用しないという回答も7割近くもあった。またマスコミなどでもとりあげられた、カンフォーラやラ・トゥールの利用は、学部生・院生のあいだではともに著しく低く、高頻度利用者は、1%にとどまる。こうした利用状況の改善のための方策を検討する必要があるだろう。

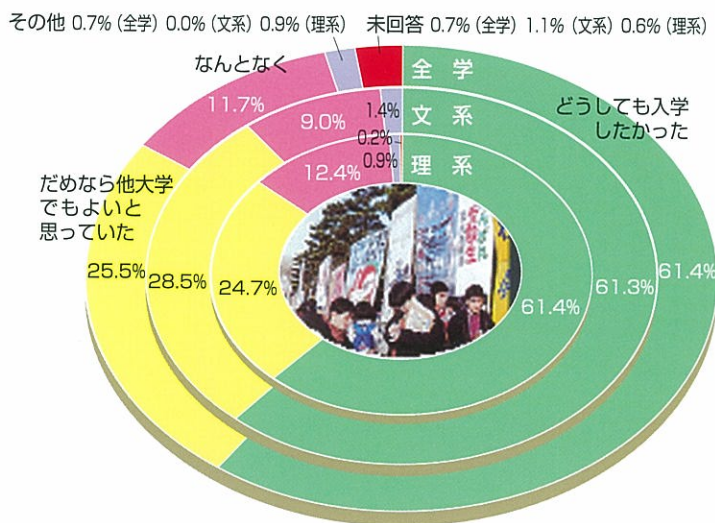
また中央図書館利用についてみると、高頻度利用者は、ほぼ2割にとどまっているが、各学部図書館図書室にも、2割以上の高頻度利用者があるので、あわせると、全体の4割が頻繁に図書館図書室を利用しているといえる。これに対して、総合博物館や学術情報メディアセンターなどの施設については、著しく利用者が少なくなり、院生に限ってみると、8割近くがまったく利用していない状況にある。保健管理センター、保険診療所などの施設は、学部生・院生の必要に応じて活用されており、《年に数回利用する》という回答が2割近くを占める。

区分	ほとんど毎日利用	週に2~3回程度利用	月に2~3回程度利用	年に数回程度利用	まったく利用しない
附属図書館	3.2%	16.0%	27.4%	34.9%	17.3%
学部等の図書館・図書室・資料室	5.2%	17.6%	34.2%	27.3%	14.4%
学術情報メディアセンター 南館	0.8%	6.5%	15.0%	21.1%	54.7%
保健管理センター(吉田、桂キャンパス)	0.1%	0.0%	0.2%	16.2%	81.4%
カウンセリングセンター	0.1%	0.0%	0.4%	1.9%	95.4%
保健診療所	0.1%	0.1%	0.2%	19.4%	78.4%
総合体育館	2.2%	3.1%	3.3%	8.9%	80.5%
総合博物館	0.2%	0.1%	0.6%	15.2%	81.9%
キャリアサポートセンター	0.1%	0.4%	1.6%	6.3%	89.6%
学部等の就職情報等検索コーナー	0.1%	0.4%	2.3%	5.5%	89.8%
学部等の談話室・国際交流室	0.3%	1.2%	1.6%	3.3%	91.6%
スポーツ指導・相談室	0.1%	0.1%	0.1%	0.4%	97.3%
クラブ・サークル部室	9.4%	7.9%	4.7%	5.1%	70.8%
運動グラウンド	2.5%	3.8%	3.9%	9.6%	78.3%
生協食堂(吉田、桂、宇治キャンパス)	40.5%	28.7%	14.9%	7.0%	7.6%
生協購買部(吉田、桂、宇治キャンパス)	31.1%	39.3%	19.7%	3.7%	4.9%
ナチュラル・ローソン(吉田南キャンパス)	2.0%	7.3%	15.1%	19.5%	54.1%
レストラン(カンフォーラ、ラトゥール[吉田キャンパス])	0.1%	1.0%	10.1%	41.1%	46.0%
レストラン(ハーフ・ムーンガーデン、ラコリス[桂キャンパス])	0.6%	0.6%	1.5%	3.9%	91.1%
学外課外活動施設(白馬山の家・白浜海の家)	0.1%	0.0%	0.1%	1.9%	95.8%

ただキャリアサポートセンター、スポーツ指導相談室、国際交流室などの施設については、十分な情報がいきわたっていないせいか、9割以上の学部生・院生が、《まったく利用しない》と答えている。これについての対策の検討も急がれる。

1. 入学と学業

「どうしても入学したかった」京大生は60%超。但し「伝統への憧れ」は減少。



京都大学・大学院への入学希望度

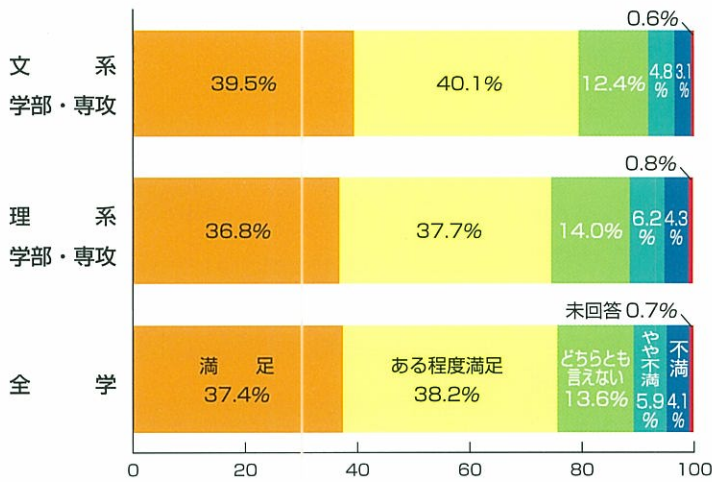
全体では《どうしても入学したかった》者は61%、《だめなら他大学でもよいと思っていた》者が26%おり、前々回・平成13年度調査(63%と25%)、前回・平成15年度調査(61%と26%)と数値に大きな変化はない。しかし博士課程に限っては《どうしても》の比率が順次低下している(前々回72%>前回67%>今回63%)。入学の動機として三位までに何を挙げるかを見ると、《京都大学の伝統や雰囲気に憧れていた》(44%)《社会的評価が高い》(42%)《私大にくらべて授業料が安い》(37%)《スタッフ・設備が優れている》(35%)《就職する前にもっと深い専門知識を身につけたかった》(32%)《将来の就職を考えて》(32%)であり、大勢に大きな変化はない。ただこのうち《京都大学の伝統や雰囲気に憧れていた》の数値のみがはっきりとした減少傾向にあること(総数：前々回51%>前回45%>今回44%。特に第一位に挙げる者の比率は同23%>19%>15%)が気に掛かる。

学部学科を選択する際に重視した点は、《自分が惹きつけられた学問分野である》を二位までに選ぶ者が81%おり、それに《最先端の学問が学べる》(31%)《将来なりたい職業に就くのに必須の分野である》(26%)《社会のために役立つ分野である》(22%)《学部・学科・大学院専攻等の教官に魅力を感じる》(15%)が続く。ただ文系と理系とでは、《最先端の学問》(文系14%、理系35%)《将来の職業に必須》(文系36%、理系24%)《教官に魅力を感じる》(文系27%、理系12%)等の項目で大きな違いが見られる。経年変化を見ると、《最先端の学問を学べる》を第一位に挙げる学部生の増加(前々回4%>前回10%>今回15%)が顕著である。

入学時に将来の進路を決めていたか否かは、《ある程度決めていた》まで含めれば7割程の者が決めているが、その内訳が文系では《決めていた》(27%)《ある程度》(44%)《まったく決めていない》(28%)なのに対して、理系では同16%、54%、29%と配分が異なること、また理系では学部生と院生に大きな比率の変化が無いのに対して、文系では学部生に限ると今度は《決めていた》が17%に激減し、その減少した10%分が《ある程度》(43%)を飛び越えて《まったく決めていなかった》(39%)に移ることが興味深い。



所属先に満足 of 学生は四分之三、カリキュラムに満足 of 学部生は半数。

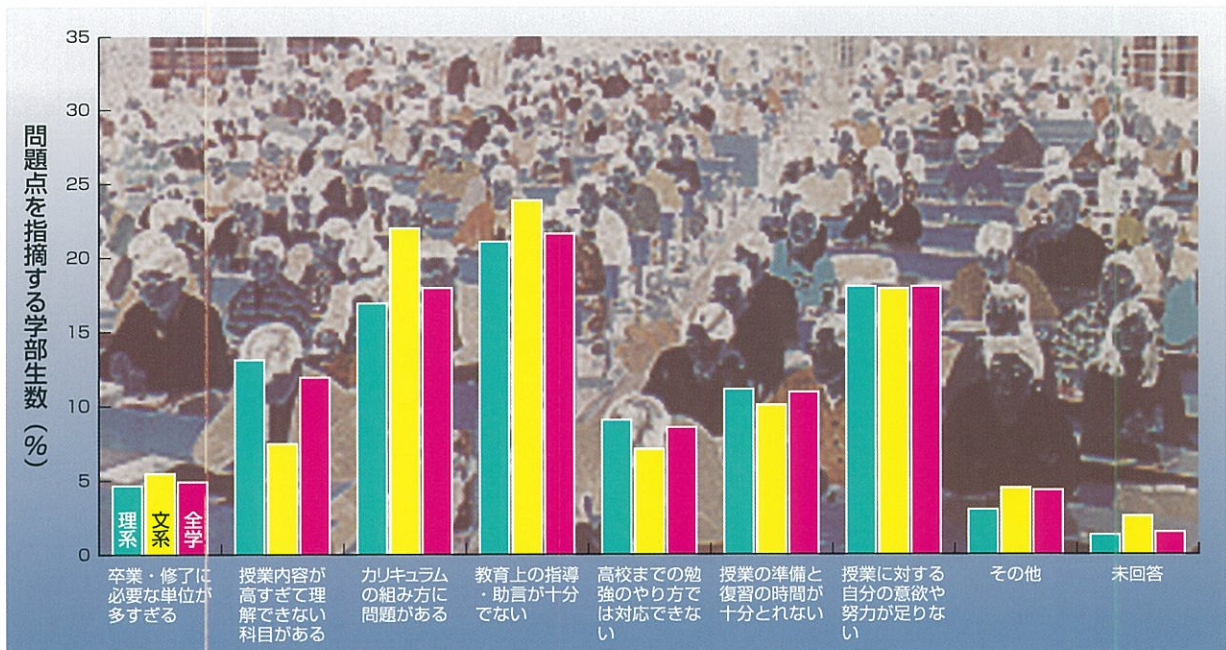


在籍する学部学科専攻への満足度は、《満足・ある程度満足》の合計が76%あり、《不満・やや不満》の10%を大きく引き離している。

しかし学部生に対する《現行のカリキュラムに満足していますか》の問いに対しては、《満足・ある程度満足》の合計は47%、《不満・やや不満》の合計は27%となり、またカリキュラムの消化について困難・やや困難を訴える学生も11%（文系7%、理系13%）居る。カリキュラムの改善点について三位までにどの項目を掲げるかをみると、《教育上の指導・助言が十分でない》(55%)《カリキュラムの組み方に問題がある》(45%)《授業の内容が高すぎて理解できない科目がある》(30%)《授業の準備と復習の時間が十分とれない》(28%)となる

学部・学科・大学院専攻に対する満足度(%)

が、同時に《授業に対する自分の意欲や努力が足りない》を挙げる者も46%いる。なお《理解できない科目がある》(文系18%、理系42%)については文系と理系で大差がある。



現行の学部カリキュラムの問題点

J. 課外活動 (サークル・ボランティア活動)



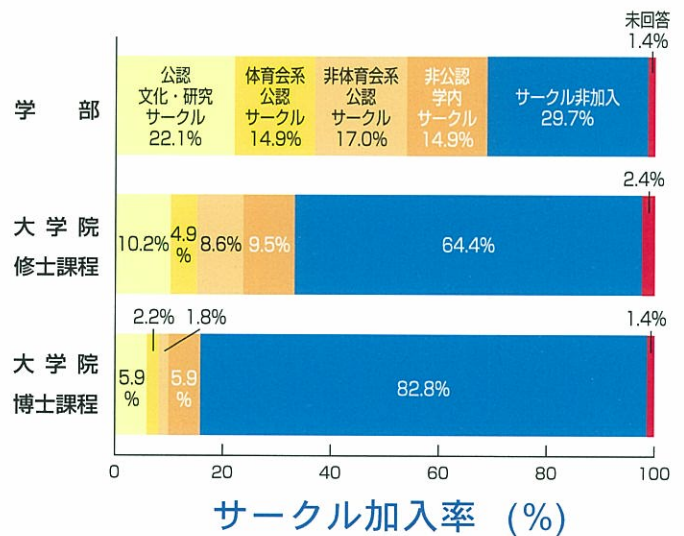
学部生の約70%はサークル活動に参加

学部生の68.9% (前回71.9%) はサークルに加入しており、そのうち45.5% (前回55.1%) は1週間あたり5時間未満の活動に参加している。サークルの種別では《スポーツ》が59.1% (前回53.6%) であり、《芸術・芸能》17.9% (前回14.9%)、《社会活動》8.0%の順に多かった。なお、前回9.8%で第三位の《趣味》は今回6.5%で第四位であった。

サークル加入の理由としては、第一順位に《活動内容が好きだから》を挙げた者が52.9% (前回56.2%) とほぼ半数を占めた。次いで、第一順位として《友人を得るため》と答えた者が16.5%であった (ただし第二順位では36.2%と最も多い)。

大学院学生については、サークル非加入の割合が高く、

修士課程で約6割強、博士課程で約8割強 (前は修士課程58.7%、博士課程79.7%) となっている。



サークル加入率 (%)

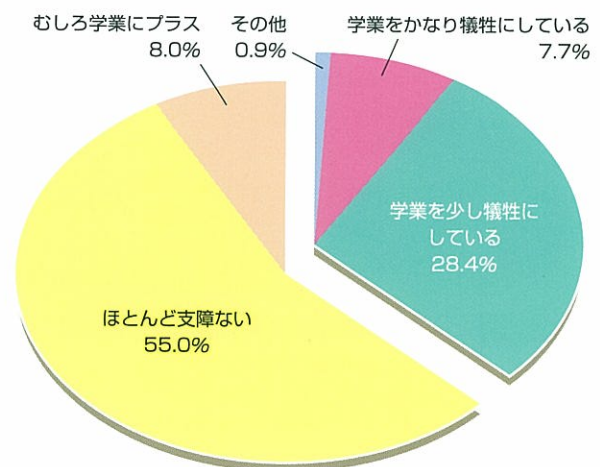


学業との両立をわきまえたサークル活動を



一方、サークルに加入していない主な理由を2つ挙げてもらったところ、非加入者全体では、《時間的に拘束されたくない》あるいは《時間がない》を挙げた者が40.5% (前回41.1%) であった。なお、学部生と大学院生の間には回答の傾向に違いがあり、たとえば《学業の妨げになる》を挙げた割合は、学部生で7.3% (前回6.6%) であるのに対して大学院生では16.3% (前回14.8%) であった。同様に、《時間がない》を挙げた割合は学部生で16.0%、大学院生では28.8%であった。

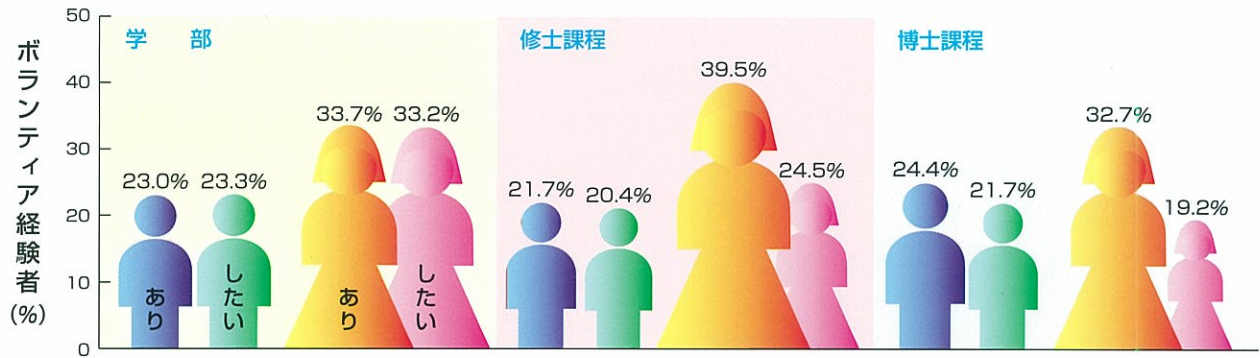
サークル活動と学業の関係では、《ほとんど支障はない》または《むしろ学業にプラスになっている》と回答した者はサークル加入者全体の63.0% (前回69.5%) であるが、《学業をかなり犠牲にしている》および《学業を少し犠牲にしている》と回答した者の割合が、それぞれ7.7% (前回4.9%)、28.4% (前回22.9%) と前回調査に比べかなり増加した。



サークル活動と学業の関係



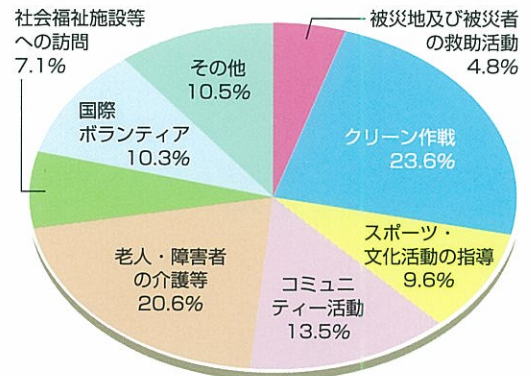
30% 近くの学生がボランティア活動を経験



京大生のボランティア経験

調査学生の26.0%がこれまでにボランティア活動を経験しており、京大生の約30%が経験者という前回データにほぼ近い。活動の内容としては、学部生では《クリーン作戦》が24.3%(前回25.6%)、《老人・障害者の付添人(介護を含む)》が22.9%(前回34.1%)、《コミュニティー活動》が15.0%、などとなっている。大学院生では、《クリーン作戦》が23.0%(前回21.9%)、《老人・障害者の付添人(介護を含む)》が18.4%(前回23.2%)、《スポーツや文化活動の指導》が12.7%(前回14.2%)、《コミュニティー活動》が12.0%などとなっており、前回(12.9%)および前々回(23.8%)には概して高い比率を示した《被災地域及び被災者の救済活動》は7.1%(学部生では2.5%)に留まった。

ボランティア活動に従事した回数については、《年に数回》が経験者全体の74.9%(前回71.0%)と大半を占めたが、《月に1～2回程度》従事した者も11.4%(前回14.9%)いた。ボランティア体験の感想としては、経験者全体の64.0%が《人生(社会)経験が得られ有意義であった》と感じており、次いで、12.3%の者が《自分自身の興味を満たした》(前回12.9%)、11.6%の者が《自分の勉強に役立った》と答えている。《あまり意味がなかった》(全体で7.3%)とした者は少数であった。



ボランティア活動の内容

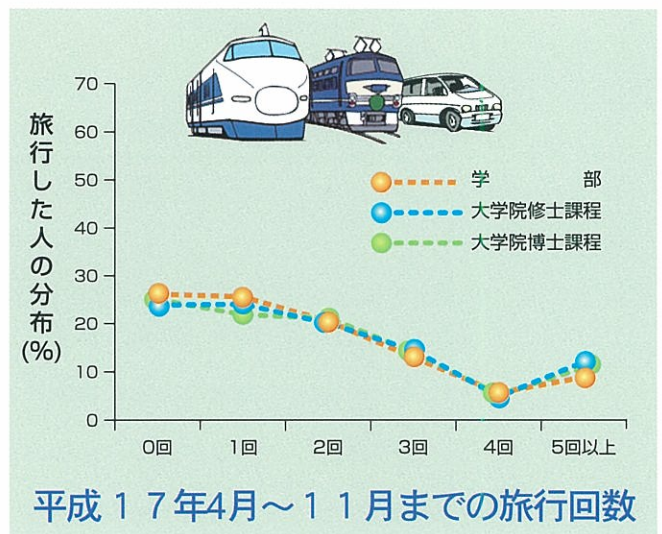
K. 旅行



大学院学生の外国旅行の目的は研究活動が主流に

学部生、大学院生とも約75%の者は1泊以上の国内旅行をしており、大学院生ほど旅行回数がやや多くなる傾向にあった。

外国旅行については、学部生、修士課程学生、博士課程学生の順に行った者の割合が高くなっており、それぞれ19%以上、24%以上、39%以上となっている。外国旅行の第一目的は、学部生では《観光》(74.0%)が圧倒的に多く、次いで《語学研修》(6.7%)、《課外活動》(6.0%)となっているのに対して、修士課程学生では《観光》(64.3%)、《学術調査》(17.1%)、



平成17年4月～11月までの旅行回数

《学会参加》(10.9%)の順に、博士課程学生では《学会参加》(50.0%)、《学術調査》(20.8%)、《観光》(18.9%)の順になっている。前回調査において、修士課程学生は学部生と同様に約70%が《観光》を第一目的としていたこと、および、博士課程学生では《学術調査》または《学会参加》を第一目的とした割合45.4%が《観光》目的のそれと同数であったことなどから判断して、大学院学生の外国旅行は学会参加や学術調査などの研究活動を目的とするケースが主流になりつつあることが窺える。

外国旅行した地域で最も滞在期間が長かったのは、全体として《アジア》44.3% (前回36.7%)、《ヨーロッパ》27.3% (前回28.6%)、《北米》15.1% (前回19.1%)の順であった。ただし博士課程学生では、《アジア》39.6%、《ヨーロッパ》26.4%、《北米》24.5%と、順位は同じであるが《北米》の割合が高くなっている。

L. 健康・悩み

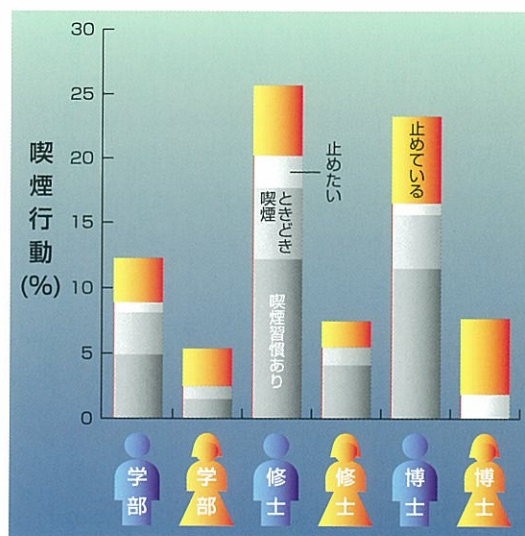
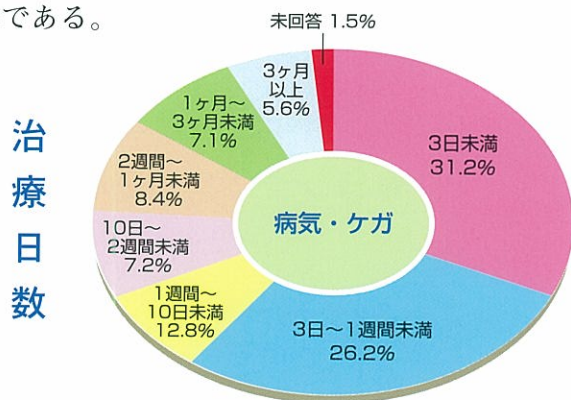


京大生の非喫煙者の割合は83.8%で健康志向が高い。

悩み事の相談相手は友人・先輩

喫煙率は、修士・博士で20%と前回調査の平均並みだが、学部生で8.9%(男)、2.5%(女)、と大幅に低下した。女性では博士は殆ど0であり、最近の女性喫煙者の増加傾向と逆である。全面禁煙に賛成する学生は全体で35%と前回よりさらに5%上昇し、さらに学部生では40%であった。健康志向が学部生で高まっていることがうかがえる。

悩み事では《勉学意欲がわからない》《授業が理解できない》《友人関係》《教官や先輩との関係がうまく行かない》は前回と同様である。相談相手も《大学内外の友人や先輩》が殆どで、教官やカウンセリングセンターは数人というのも不変である。



喫煙者分布

京大生の悩み (悩みをもったり感じた人)

区分	授業が理解できない	勉学意欲が湧かない	留年した	失恋した	友人関係がうまくいかない	研究室の教官や先輩との関係がうまくいかない	サークル活動と学業が両立しない	セクシャル・ハラスメントを受けた	その他
学部 男	19.1%	26.3%	2.3%	10.0%	15.0%	2.6%	11.4%	0.1%	13.2%
学部 女	13.4%	21.7%	0.9%	11.0%	19.0%	1.5%	15.7%	0.3%	16.5%
大学院 男	11.8%	25.5%	2.3%	11.7%	10.1%	15.2%	3.0%	0.4%	20.0%
大学院 女	11.0%	21.2%	1.6%	6.7%	11.4%	19.2%	3.1%	0.8%	25.0%

M. 進路（進学・就職）

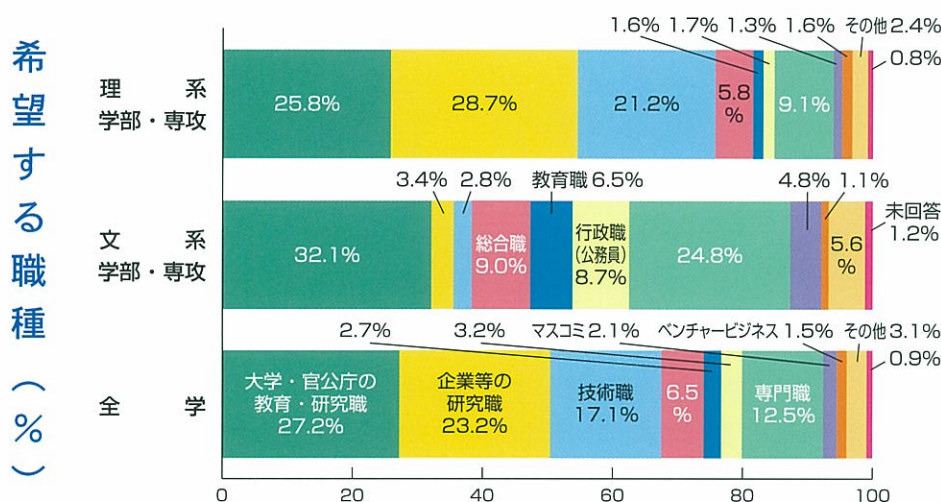


学部生の三分の二、修士生の四分の一が進学

学部生の66%（理系75%、文系36%）が修士課程への進学を予定しており、また修士生の24%（理系21%、文系36%）が博士課程への進学を予定している。

将来の職業については、《大学・官公庁の教育・研究職》が27%で総合第一位（文系32%、理系26%）であるが、その比率は微減を続けている（前々回・平成13年度調査35%、前回・平成15年度調査30%）。なお理系のみに限れば《企業等の研究職》が29%（学部生では33%）で第一位になる。専門職学位課程のみを取ると当然のことながら《専門職》を選ぶ者が91%に達する。《ベンチャービジネス》を選ぶ者は全体で2%以下であり前回と変わらない。

その職業を選択する理由として三位までの間に何を選ぶかの総計は、《自分の特技・能力や専門知識が活かせる》（70%）、《独創性や創造性を発揮できる》（36%）《人を助けたり社会に奉仕する》（35%）、《安定した生活が保障されている》（27%）、《十分な収入が期待できる》（28%）であり、前々回・前回調査と大きな変動はない。しかし第一位に何を選ぶかに限ると、《専門知識が活かせる》（前々回51%>前回47%>今回41%）が減少し、代わって《社会に奉仕する》（14%>16%>21%）や《十分な収入が期待できる》（4%>7%>9%）が増加している。就職地域の希望では、《京阪神地区》（前々回37%>前回36%>今回40%）と《首都圏》（同7%>12%>13%）が微増する反面、《地域を問わない》（同42%>44%>34%）が今回激減した。





京都大学学生生活白書

平成 17 年度《学生生活実態調査》のまとめ－概要－

平成 18 年 3 月 発行

編集 平成 17 年度学生生活実態調査委員会

委員長 寺田浩明 (法学研究科教授)

委員 松田素二 (文学研究科教授)

福原俊一 (医学研究科教授)

西尾嘉之 (農学研究科教授)

元木泰雄 (人間・環境学研究科教授)

田村 類 (地球環境学学堂教授)

発行 京都大学学生部

〒 606-8501 京都市左京区吉田本町